

令和7年度

入学試験問題

国語

注意事項

1. 試験問題は指示があるまで開かないでください。
2. 解答は必ず解答用紙に記入してください。
3. 字数制限のある問題は、句読点や符号も解答の字数に含みます。
4. 問題冊子・解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。

受験番号	氏名	

近畿大学附属広島高等学校東広島校

問題は次のページから始まります。

一 次の【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】を読んで、後の問いに答えよ。

【文章Ⅰ】

人の言語は、同じ内容のことも、多様な表現で言い表すことができるという特徴をもっている。

昨年、^①「名物ロボット、半年で『クビ』 大量失業の変な理由」という記事を新聞で読み、非常に興味深かった。長崎県のテーマパーク内で、「ロボットが初めて従業員として働いたホテル」として話題になったホテルの話である。フロントでの客との応対は限られているから、「朝食は何時?」「チェックアウトの時間は?」などの質問の定型文とその返答例をロボットに与えておき、文の変形パターンなどを学習する多少の学習機能を作りこんでおけば、ロボットは客に聞かれたことを認識し、応答できると考えたのだろう。

実際、客の質問の内容は、想定内のものだった。

I、そのような質問でも、客一人ひとりがみな別の表現をす

るので、ロボットはお手上げになっちゃったそうである。

この記事は、同じ内容を伝えるにも、言語の表現のしかたにはほぼ無限のバリエーションがあるということ、単に定型の表現を暗記しても役に立たないことをあらためて気づかせてくれた。

これをさらに進めて考えれば、「ことばのセンス」というのは、そのバリエーションの中で、もつともその状況に適した言語表現ができるということと考えてよいかもしれない。似た概念に対して、人間は、繊細な意味の違いやニュアンスによつて同じような概念を細かく言い分けることができるように、数多くの単語を創造し、複雑で豊かな言語体系をつくってきた。同じ内容のことを、単語の意味の知識だけでなく、^②構文や形態素の知識、語用の知識など様々な要素の知識を自在に組み合わせて、状況や自分の立場、伝える相手によつて、実に多様に表現できる。それが人間の言語である。

AIは要素データを膨大にもつても人間のように要素を自在に組み合わせることができない。

II 多様で自

在な言語表現の理解も産出もできないのである。

入試改革で記述式問題のことがずいぶん批判され、実施が延期されることになった。その最大の理由は、短期間に、採点者の間でも受験生の自己採点ともぶれずに客観的に採点することが難しいという懸念である。

今回の問題は、国語であれ、外国語であれ、表現の無限の多様性をもつという言語の性質と、その運用能力を誰がしても同じ評価ができるような客観的なテストで測るといふ入試の大前提との矛盾を露呈したように思う。国語の試験で記述式を採用するのなら、この矛盾をどのように解決するかをまず考えるべきである。

②しかし、本来、学力は記述式で測るべきものなのである。国語も英語も、いくら頻度が低く、特別な文脈でしか使われない単語を知っていても、それを使って明確に意味が伝わる文章が書けなければ、それこそ「意味がない」。

私の認識では、教育改革の一環として、入試も断片的な知識を吐き出すだけのテストではなく、様々な知識を統合して思考し、言語で表現することができる総合的な能力を測るべきだという理念が記述式テスト導入の背後にあつたはずである。

この理念は認知科学が明らかにしてきた知識と思考の性質に鑑み、正鵠を得たものである。③それだけに、今回の事態はザンネンでならない。

記述式試験をセンター入試で取り入れることの是非はともかく、すべての教科において、知識を統合し、思考し、言語表現する資質を育てることが教育の最終目標になるべきである。

スマホやパソコンでテキストを打っていると、ことば力がどんどん退化していく気がする。ある単語を打つと、次の単語が予測され、タップするだけで定型文が書けてしまう。これでは深い認知処理は起こるはずもない。このような現状で、国語は「ことばのセンス」を日本国民が身につける最後の砦とりでと**言うべき教科**なのである。では、この「センス」を磨くため、国語教育は何ができるのだろうか。

良質の文章を読んだり聞いたりすることが必要なことは当然であり、そのために国語の教科書は良質かつ多様なジャンル

の文章をバランスよく豊富に掲載してほしい。読書離れが進んでいる中で、国語教科書の担う役割はますます重要である。「ことばのセンス」を身につけるためには、文学、評論、随筆など多様な文章のサンプルを深く読み込むことが欠かせないからである。しかし、読むだけではセンスは十分に磨かれない。

これは料理を引き合いに考えるとわかりやすい。料理も「センス」が大事である。料理はいくらレシピを読んでも、実際に作ってみなければできるようにならない。毎日料理をつくれれば、それなりに、「切る」「煮る」「焼く」などの要素スキルは習得するだろう。しかし「センス」がなければ、レシピをアレンジして、自分独自の味を作ったり、自分で新しい料理を考え出したりすることはできない。ただ作って食べるだけでも料理のセンスは身につかない。作って味見をし、先生や先輩の作った料理と比較し、分析する。そういう修業を長年積み重ねて徐々に「センス」が習得される。

ことばのセンスも同じだ。テキストに知らない単語や表現があれば、辞書でその意味を調べる。様々な文を作ってみる。他にもっとよい表現ができないか考える。類義の単語や表現でも文を作る。いくつかの文を作り、比較してどの文がもっともその状況で効果的かを吟味する。認知科学では、このような比較の過程が深い認知処理と新たな洞察をもたらすことを明らかにしている。このような、ことばの意味を調べ、使い、多様な表現を比較する経験の積み重ねで、ことばのセンスは徐々に、しかし確実に育っていくはずである。

① もちろん高いレベルの「ことばのセンス」を高校生までに習得することを目標とすることは現実的ではない。これは一生
④ コウジヨウし続ける類の能力である。しかし、国語教育は生徒がことばのセンスを自分で育て、ことばの宇宙を自分で探究
① していくきつかけと手立てを与える機会であってほしい。

（今井むつみ「ことばのセンスを育てる国語教育」『国語教室』二〇二〇年四月号掲載より）

(注) 形態素——単語よりも小さな、意味を持つ最小の単位。

認知科学——情報処理の観点から知的システムと知能の性質を理解しようとする研究分野。

正鵠を得た——本質をとらえた。

【文章Ⅱ】

幼児期の学びと児童期以降の学びで大きく違うところは、日常生活場面ではなく、学校という文脈で習得しなければならない知識が格段に増えることだろう。国語、算数、理科、社会、英語などの教科ごとに分かれた膨大な量の「知識」を学ぶことになる。

できるだけ大量の知識を「教えよう」「教わろう」というエピステモロジーを教える側、教わる側のソウホウが持つていると、知識の断片(「事実」と考えられていること)をとにかく「覚える」というドネルケバブ・エピステモロジーに必然的に行き着いてしまう。そうならないようにするためには、狭い範囲の分野だけを深掘りすればそれだけでよいというわけではない。知識に幅がなければ、様々な状況で使える知識がない(足りない)ことになってしまう。知識のシステムを構築するためには広がり、深さと、どちらも必要なのだ。

そこで、児童期以降の学びでは時間の使い方がカギになる。いったいどうすれば、好きな学校外の活動の時間も運動する時間も十分なスイミンをとる時間も確保しつつ、知識の広がり、深さを得ることが可能になるのだろうか。それには、子どもが自分自身で学ぶ力を身につけるしかない。そもそも、学校でどれほど幅広くいろいろな分野をカバーしても、技術や求められる知識が短期間にどんどん進化していく現代社会では、必要な知識は自分で身につけ、自分で自分を進化させていくしかない。ドネルケバブ・エピステモロジーでこれからの世界を生きていけないことは明らかだ。

探究エピステモロジーをもち、ずっと学びつづける探究人を育てるために何をすべきか。まず第一に、学校は「知識を

覚える場」ではなく、知識を使う練習をし、探究をする場となるべきだ。知識を使う練習とは、持っている知識を様々な分野でどんどん使い、それによつて、新しい知識を自分で発見し、得ていくということである。それこそがアクティヴ・ラーニングの本質である。

（今井むつみ『学びとは何か―探究人になるために』より）

（注） エピステモロジー——ここでは、人が認識していること（知識）そのものに価値がある、と考えること。

ドネルケバブ・エピステモロジー——筆者の作った言葉で、「知識は、ケバブという料理のように切り分けて分配できる、価値のあるものだと考えること」という意味で用いられている。

問一 二重傍線部㉔「ザンネン」・㉕「コウジョウ」・㉖「ソウホウ」・㉗「スイミン」のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 I ・ II に入れるのに最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア しかし イ さて ウ たとえば エ だから オ つまり

問三 傍線部①「名物ロボット、半年で『クビ』」とあるが、なぜ「クビ」になったのか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア AIが持っている膨大なデータは、人間が認識できるレベルをはるかに超えているので、ロボット従業員の表現の多様さ、言葉の組み合わせの豊かさに、客がついていけず困ってしまったから。

イ AIが誇る豊かなデータも、量があまりに膨大であるため、その情報が正しいか否か、という正確性の確認にまではまったく手が回らず、接客の際に誤った情報を伝えてしまうことがあったから。

ウ たとえAIが言語についてのデータを膨大に持っていたとしても、この出来事が起きた時点での技術では、人間の言語の多様さ、組み合わせの自在性に対応できず、適切な接客ができなかったから。

エ たとえAIの持つデータの量が豊富であったとしても、当時の科学技術の発達段階では、人間とコミュニケーションを取るにはまだ情報量が足りず、接客が滞り、不満に思う客の訴えが頻発したから。

問四 傍線部②「本来、学力は記述式で測るべきものなのである」とあるが、それはどうしてか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 言語運用能力の養成には、日常ほとんど使われることのない単語ではなく、使用頻度の高い単語を習得して、その知識を統合して思考、表現するという記述式テストの経験が欠かせないから。

イ これまでの知識偏重教育を改革するためには、知識が不足していても文章を記述できさえすれば高評価を得られるテストを実施して、言語表現力の大切さを教育の目標にしていくことが必要だから。

ウ 断片的な知識をどれだけ習得しているかを問う客観的なテストでは、受験生の能力をまったく評価できないが、思考力、表現力を測る記述式テストであれば、受験生の能力を正當に評価できるから。

エ 明確に意味が伝わる文章を書くことが求められる記述式のテストであれば、自分が持っている情報に関係づけてものごとを考え、言語で表現するという教育の目標ともいえる力を測ることができるから。

問七 【文章Ⅰ】の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「ことばのセンス」というキーワードについて、「ロボット店員」という時事的な話題や、「料理」という生活感のある事柄を具体例に用いることでわかりやすく説明し、筆者の考察とこれからの教育についての課題を述べている。

イ 「ロボット」や「国語」、「料理」といった一見無関係に思えるような話題を複数提示してそれらの共通点について技巧的な表現で説明し、最終的に一つの結論に収束していく、という説得力のある論理展開が見事な文章である。

ウ 現代の教育に関する課題を、「ロボット」という科学技術の話題から「料理」という身近な事柄まで幅広い視野で複数提示し、それらの共通する性質を、思考を喚起する疑問表現を繰り返して読者自身に気づかせるようにしている。

エ 「ことばのセンス」という言葉を何度も繰り返すことよってそのキーワードがいかに大切なのかを印象づけておきながら、一つ一つの具体例を読み進めるうちに正反対の結論に到達する、という意外な展開で読者をひきつけている。

二

宝良^{たから}（たーちゃん）は優秀な選手としてテニスに打ちこんでいたが、高校二年生の秋に交通事故に遭い、車いす生活になって心を閉ざしてしまった。そんな宝良を心配した親友の百花^{ももか}は、ある日家に押しかけていく。次の文章は、それに続く部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

「たーちゃん、開けて」「開けてくれないと騒ぐから」「ノックしながら歌っちゃうから」「十二時間くらいなら余裕でノックしまくるから!」とドアを叩き続けること二分余り、鍵が開けられる音がした。スライド式のドアがすばらしい勢いで開いた。

「いい加減にしてよ!」

震えあがるような眼光でにらみつける宝良は、百花と同じようにジャージにトレーナーを着てパーカーをはおっていた。百花は、約一カ月半ぶりに会う宝良との目線の違いに衝撃を受けた。車いすに乗った相手の顔は、こんなにも低い位置にあるのか。

でも宝良はやはり宝良だった。にらまれると身体がすくむような眼光はそのままだ。^①その眼光に負けないように百花は腹に力をこめて、ジャージのポケットから出した預金通帳を宝良の鼻先に突きつけた。さすがの宝良もたじろいで、車いすを引いた。

「何これ……」

「わたしの全財産。たまに使っちゃうこともあったけど、小学一年生からずっとお年玉貯めてて四十万円ある。このお金で、たーちゃん、わたしと一緒に福岡に行つて。福岡の飯塚市。五月十二日の火曜日から五月十七日の日曜日まで。車いすテニスのジャパンオープン、見に行こう」

宝良は、しばらく何も言葉が出ないという顔で百花を凝視^アしていた。たつぷり十秒は絶句したあと、ようやく口を開い

た。
②「……ばかなの？」

「たーちゃん、言ったよね。車いすテニスはテニスじゃないって。テニスの妥協で代用品なんだって。でもたーちゃん、車いすテニスの試合、ちゃんと見たことあるの？」

宝良は答えず、唇を引き結んだ。やっぱり、そうなのだ。百花は預金通帳を突き出したまま続けた。

「確かに車いすテニスと、テニスは別の競技だよ。わたしたちがやってきたテニスとは全然違う。だって車いすで走るんだもん。車いすで走りながら球を打つんだもん。それで相手に勝たなきゃいけないんだもん。すつごく難しい、高度な競技なんだよ。ねえ、たーちゃん。車いすテニスはやったことあるって言ったよね。やらされた、って。でもそれ、違うから。確かに車いすテニスだったかもしれないけど、たーちゃんがやったことってレベル1くらいのことですよ。ううん、レベル0・3かも。その程度で車いすテニスを知った気になっちゃってるの、どうなの？」

内心ガチガチに緊張しながら、^③百花は挑戦的に口角を吊り上げた。

宝良の目に、ゆらつと炎が燃えるように鋭い光がともった。

そう、この目だ。戦うことに血を湧きたたせる宝良の目だ。

「だから本当の車いすテニス、たーちゃんに見せてあげるよ。飯塚のジャパンオープン、見に行こう。日本どこるかアジア最高の大会なんだよ。世界中のすごい選手が集まって戦うんだよ」

④「ばかなの？ 福岡って九州じゃない。そんなところに行けるわけない」

「行けるよ。羽田空港から福岡空港まで飛行機で行って、福岡空港から新飯塚まで高速バスで行けば、あとはタクシーでちよよいのちよいだよ。ちゃんと調べたもんね」

「——だから！ モモは行けるよ、自分の足で九州でも沖縄でも北海道でもシベリアでも行けばいい！ でも私はこんなんだ

から、九州なんて遠いところ行けるわけない！」

⑩「行きなさい、宝良」

凜とした、と形容するにはやや鋭い声が響いて百花は驚いた。

いつの間にか二階に上がってきた紗栄子は、まっすぐに歩いてきて百花のかたわらに立ち止まると、娘を見つめた。

「宝良。あなた、パソコンで車いすテニスの動画をいくつも見てたわね。三國智司選手みくにさとしのロンドンパラリンピック決勝とか、七條玲選手しちじょうれいの全豪オープンとか。本当は関心があるんでしょう。違う？」

え、と驚いて百花は宝良を見た。宝良は動揺を浮かべたあと、眉を逆立てた。

「どうしてそれ」

「私に知られるのが嫌なら、次から私のパソコンを使って動画を見た時には履歴を消しておきなさい」

宝良を黙らせたあと、紗栄子は百花に目を移した。

「百花ちゃん、本当に宝良を福岡につれて行ってくれるなら、かかる費用は百花ちゃんのみですべてこちらで出すわ。お願いできる？」

「えっ？ いや、そんな……！」

「いいのよ、お金ならあるの。宝良の事故の賠償金が」

紗栄子が淡々と発したその言葉に、百花はただ息を呑んだ。

宝良、と紗栄子が静かに呼びかけた。

「あなた、人生がくるってしまったと思ってるでしょ。確かにそうね。でも、あなたにけがをさせて、本当だったら一生かかって手に入れられるかどうかのお金を支払うことになった人も、だいぶ人生がくるってしまったと思うわよ」

「……だから何？ だからゆるせてこと？」

「そうは言っていない。ただ、あの人はあなたが意識を失つてる間に泣きながら土下座して、いろいろな社会的制裁も受けて、あなたにできるだけの償いもした。それで宝良、あなたは？　これからどうするの？　あんな死んでもおかしくなかった事故を奇跡的に生き延びて、これからも続いていく人生を、あなたはどう生きるの？」

母親に問いかけられて、宝良の瞳が小さくゆれた。

「宝良。これからは車いすで生活することになるって説明した時、あなた言ったわね。『死にたい』って。それは今でも変わっていないの？」

⑤ 宝良は唇を引き結んだまま答えない。紗栄子が凄^すみをこめて目を細めた。

「それなら、死ぬのはいつだってできるわ、冥土の土産にジャパンオープンを見てきなさい。車いすじゃ九州は無理なんてあんたは言ったけど、ばかばかしい。車いすの選手が世界各地から日本に来るんだから、すでに日本にいるあんたが会場まで行けないはずがないでしょう。アジア最高の大会を見て、ここに帰ってきたその時にもまだ死にたいなら、私が母親として責任をもってあんたに引導を渡すわ」

「おお、おばさん……!？」

「そうと決まったら、百花ちゃんの親御さんにもご相談しなくちゃね。今からおじやましてもいいかしら。宝良、何してるの、さっさと準備しなさい」

(中略)

穏やかな理系の父はもとから百花に甘く、きびきびした体育会系の母も物事を深く考えないたちなので、ものの数分で百花と宝良の飯塚行きは許可された。一度許可すると「チケットとホテルの手配は僕がしましょう。なに、出張で慣れてますから」「せっかくだから私たちも同行します、九州つてまだ行ったことないですよ」と百花の両親はとたんになり、むしろ紗栄子のほうが二人の勢いにちょっと引いていた。

「……たーちゃん、無理やりごめんね。でも、どうしてもわたし、たーちゃんと本物の車いすテニスの試合を見たい」
紗栄子と宝良が帰る頃には、もう夜空に無数の小さな光の粒がかがやいていた。

スロープから車に乗りこもうとしていた宝良は、百花が小さな声で謝ると、車いすのハンドリムから手を放して息をついた。

「試合なら見たよ。モモに車いすテニスしないかって言われた日から何度も。三國智司とか、ベルナル・デユリスとか、ヨハンナ・フィンセントとか、七條玲とか」

——そう、先ほど紗栄子が話していた。宝良はパソコンで車いすテニスの試合をいくつも見ていた、と。

「……どうだった？」

二秒おいて、すごかった、と返った声は小さな雨粒みたいだった。

「車いすの動きがあんまり速くて、なめらかで、地面を走ってるんじゃないかって氷の上を滑ってるみたいだった。あの人たち、コートにいる間ほぼ停とまらないんだよ。八の字みたいに動きながら

I

走ってる。車いすって一回停止すると動き

出す時にすごく力があるし、スピードが出るまでに時間もかかるから。あんなに腕を酷使するのに、どうしてフルセット戦えるのかわかんない。ラケットを持ったまま車いすをこいでるのに、なんであんなスピードが出るのかわかんない。車いすはサイドステップができない弱点があるから、相手に一瞬は背中向けてターンしなきゃいけないけど、あの人たちは背中向ける時に打たれたはずの球筋も読んでる。たぶんターン前の相手の位置とかフォームとか打球音の方向から予測してるんだと思うんだけど、それ、そんなの、もう超能力だよ。……あんなプレー、私には無理。車いすになってから、行きたい場所に行くまでに信じられないくらい時間がかかる。走ろうとしてもすぐに腕が痛くて動かなくなる。車いすを動かすだけで精いっぱいなのに、その上テニスなんてできると思えない。でもテニスを取ったら、自分に何が残るのかわかんない。テニスができない自分が自分って言えるのかもわかんない。わかるのはテニスしてないと苦しいってことだけ。それ以外は本

当にわかんないの、全然、何も——」

声が震えた瞬間、宝良はきつく唇を噛みしめた。宝良は、人前で涙をこぼすことはおろか、声を震わせることすら自分にゆるさない。

そんな融通がきかなくて頑固で誇り高い宝良が、大好きだった。

そして今ここで車いすに座っている宝良も同じだ。素直じゃなくて意地っ張りで、こんな時くらいは弱音を吐いてもいいだろうに、やっぱりそうはできないほど誇り高い。

宝良は宝良だ。宝良のままだ。何が起きても、これからどんな道を選ぶとしても。

「……ちよつと。なんでモモが泣いてるの？」

「たーちゃん……大好きだから、ジャパンオープン、一緒に行こう……」

「何それ、全然文脈つながってない……」

「わたしも、わかんない。ずっとわかんなかった。たーちゃんの役に立ちたいって思ってるのに、わたしに何ができるのかわかんなくて、元氣の出て何か言いたいけど、わたしは何もわかってなくて変なこと言つて傷つけちゃうんじゃないかって思うと怖くて。今でもわかんない。何もわかんないの。だから、とにかく一緒に行こう。アジアで一番すごい大会見て、Ⅱ 無理って思ったら、車いすテニス、しなくていいから。それでもたーちゃんはたーちゃんだから。テニスしてたって、してなかったって、たーちゃんはわたしのヒーローだから」

「……モモ、泣くのやめてよ。鼻水たれてる」

「何かわかるかもしれないし、何もわかんないかもしれないけど、Y 行こう一緒に——」

のちに宝良はこの時の百花の顔を「ぐしゃぐしゃのびしゃびしゃ」と形容するのだが、そのぐしゃぐしゃでびしゃびしゃの顔にさしもの宝良も恐れをなしたらしく、わかった、行くよ、行くから、と幼児の機嫌をとるように言った。百花は駄々っ

子のように泣きながら、行こう、行こうね、一緒に、とくり返した。

テニスをしても、しなくても、自分の足で走っても、車いすで走っても、宝良は宝良だ。宝良が宝良であってくれればそれでいい。それだけでいい。

けれど、願わくば、見つけてほしい。

これからの人生を照らす、光を。

(阿部あきこ暁子『パラ・スター (size 百花)』より)

※出題にあたり、本文を省略したところがある。

問一 波線部㊦「凝視」・㊧「逆立」・㊨「弱音」・㊩「機嫌」の読みをひらがなで答えよ。

問二 空欄 I ・ II に入れるのに最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答

えよ。

- ア やっと イ こっそり ウ ゆっくり エ ずっと オ やっぱり

問三 二重傍線部①「たじろいで」・②「融通がきかなくて」の本文中での意味として最も適当なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

①「たじろいで」

- ア 意味が分からずにぼうぜんとして
- イ とてつもない恐怖を感じて
- ウ 言葉を失うほどにひどく驚いて
- エ 勢いに押され気後れを感じて

②「融通がきかなくて」

- ア その場にふさわしい対応ができなくて
- イ 自分を許すことができなくて
- ウ 他人の気持ちを汲みとることができなくて
- エ 感情を抑えることができなくて

問四 傍線部①「その眼光に負けないように百花は腹に力をこめて」・③「百花は挑戦的に口角を吊り上げた」とあるとき
の「百花」の様子として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 相手を興奮させないように用心しながらも、自分の計画を実現するために「宝良」をどう追いつめていけばいいかと冷静に観察を続けている。

イ 本心では相手の様子にびくびくしながらも、何としても「宝良」をその気にさせなければならないと無理にでも勇気を奮い起こしている。

ウ こんなことを言っているものかと迷いながらも、「宝良」に自分の弱さを自覚してもらういい機会だと考えてわざと不敵な態度を取っている。

エ うまく事が運ぶのだろうかと不安を感じながらも、「宝良」に自分の思惑を見透かされないためにも「紗栄子」の助力を心待ちにしている。

問五 傍線部②「……ばかなの？」・④「ばかなの？」とあるときの「宝良」の様子として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア ②は「百花」の子供じみた言葉に軽蔑を覚えており、④は「百花」のさらなる訴えにますます嫌悪を感じるとともに、自分の現状を分かせようと必死になっている。

イ ②は「百花」の現実離れた提案に怒りを感じており、④は「百花」の挑発的な態度の中に自分をからかう意図を見抜いて、それに決して負けまいと身構えている。

ウ ②は「百花」の思いがけない申し出にあきれており、④は「百花」の提案の無謀さに苛立ちいらだを覚えるとともに、自分の置かれた状況に対して悲観的になっている。

エ ②は「百花」の一方的な行動にうろたえており、④は「百花」のひとりよがりな考えにあきれてしまって、誰も自分を理解してくれないと孤独に包まれている。

問六 傍線部⑤「宝良は唇を引き結んだまま答えない」とあるときの「宝良」についての説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 深い絶望の中で何も光明が見出せずにいる自分の気持ちを理解しようとしめない周囲の人を疎ましく思っている。

イ もう自分には何もできないという思いが根強く残り、周囲の人の気持ちに応えられないもどかしさを痛感している。

ウ もはや自分なりの進むべき道を見つけたにも関わらず、周囲の人にきつく言われたことでかえって心を閉ざしている。

エ 内心では少しずつ目指すべき方向を考えつつあるものの、周囲の人に自分の心のうちを素直に表明できないでいる。

問八 本文についての説明として適当でないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 百花は自分の思っていることもうまく表現できないような不器用な面も持っているが、親友の宝良のためなら、
一途いちずに行動できる熱意ある人物として描かれている。

イ 目の様子を様々に描写することで宝良の内面が読みとれるような工夫がなされており、そこから、気の強さを持つ反面、迷いの中にある彼女の不安定な心がうかがえる。

ウ 紗栄子は終始厳しい態度で宝良に接しているが、実は、娘の自立や将来について深く心を痛めており、また、そのため行動も惜しまない人物としてあらわされている。

エ この文章の語り手は一貫して百花と同じ視点に立っているため、読者は百花が知りえない宝良親子の心中を最後まで理解することができず、作品にひとつの緊張を生んでいる。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

伯瑜^{はくゆ}いとけなき時^①、心にたがふことあれば、母、杖^{つゑ}して打ちけり。伯瑜、杖を受けて、痛み泣くことなし^②。母、老いて後、また伯瑜を打つに、伯瑜、おほきに痛み泣きけり。母のいはく、われが昔打ちしに、泣くことなかりき。今更に痛み泣くこと、われを恨むる心あるべしと、あやしみ言へり。伯瑜、答へていはく、母の若くして打ちし杖は、強く当りて、身にしみしかども、心にはいまだ痛まざりき。今も杖を痛み恨むるにはあらず。杖の弱く当るにつけて、^③ 齡衰^{よはひ}へて、力の尽き果てたることを憂へ泣くなりと言へり。母、これを聞くに、せむかたなくあはれと思ひけり。

秋の夜の老い^④の寝覚めにうつ衣弱る響きはいかが悲しき

『蒙求和歌』より

(注) いとけなき時——幼い時。

老いの寝覚め——年をとつて、夜中などに目を覚ましがちになること。

問一 二重傍線部「答へていはく」を、現代仮名遣いに直せ。

問四 傍線部②「われを恨むる心あるべし」の本文中の意味として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 私を恨む気持ちがあるのだろう。

イ 私を恨む気持ちがあるはずがない。

ウ 私を恨む気持ちを持つべきだ。

エ 私を恨む気持ちを持ってよい。

問五 傍線部③「これを聞くに」とあるが、「これ」の内容はどこからどこまでか。最初と最後の三字を、本文中から抜き出して答えよ。

問六 次に示すのは、本文を読んだ生徒たちの会話である。これを読んで、後の(1)・(2)の問いに答えよ

生徒A——この文章は、伯瑜とその母の話だったよね。

生徒B——伯瑜は幼い時も大人になってからも母親に杖で打たれているよ。その反応の違いがこのお話の注目ポイントなんだね。

生徒C——ほんとだ。幼い時は泣いていなかったのに、大人になってから涙を流すことになったのは、幼い時にはな

った I に受けた痛みからなんだね。

生徒A——伯瑜の気持ちを表現したのが、最後の和歌の「老いの寝覚めにうつ衣弱る響きはいかが悲しき」なのかな。

生徒B——なるほど。伯瑜は II として描かれているんだね。

(1) 空欄 I に入る一字を、本文中から抜き出して答えよ。

(2) 空欄 II に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 優れた和歌を詠む知恵者

イ 母親のことを思う孝行者

ウ 他人の悪事を許す寛大な人

エ 母親に意見する勇気がある人

